

# 第1回新美術公募展の在り方有識者会議

## 議事録

**日 時** 平成30年12月6日(木) 14:00～16:00

**場 所** 宮崎県立美術館 1階アートホール

**出席者** (委員)

石川委員、二宮委員、岩切委員、原田委員、青井委員、川越委員、大野委員、  
小河委員、泰田委員、大岐委員、河辺委員、藤元委員、金子委員

(オブザーバー)

宮崎日日新聞社 和田常務、坂元業務局次長、中島事業課長  
県総合政策部みやざき文化振興課 野別主事

(事務局)

県生涯学習課 後藤課長、森山課長補佐、向江主幹、黒木社会教育主事  
県立美術館 飛田館長、加塩副館長、木村学芸課長、清主幹、清水主査

**公開及び非公開の別** 公開

**傍聴者** 1名

### 議 事

#### 1 開会

(事務局)

#### 2 主催者あいさつ

(教育次長)

両展とも県民に親しまれている美術展である。しかし、近年は出品者・出品数の減少等共通する課題もあり、宮日とともに協議し、両公募展を統合して新たなステップを踏み出す時ではないかということになった。魅力ある公募展にするためにも皆様から広くご意見をいただきたい。

#### 3 委員・オブザーバー紹介

(事務局)

#### 4 座長・座長代理の選出

(事務局)

新美術公募展の在り方有識者会議設置要綱第3条の規定により座長を委員の互選によって選出。

事務局一任により、川越委員を選出。座長代理に石川委員を選出。

#### 5 協議 議題「新美術公募展の在り方について」

座 長 まず事務局からこれまでの経緯や統合のイメージ(案)、協議の視点等について説明願います。

事 務 局 (資料4～5ページに沿って説明)

それぞれのネットワークを生かしながら新しい展開、発展的な再構築を目指したい。2020年は本県で国民文化祭(国文祭)があり、記念的な意味を含めて開催をすることも考えられる。

座長 オブザーバーの宮崎日日新聞社から補足等はないか。  
 オブザーバー 事務局の説明のとおりです。宮日美展は昭和 24 年に県展として、絵画部門のみでスタートした。戦後の文化芸術の復興に寄与した。いろいろな意味で新しいやり方を見出し、生まれ変わった公募展にしたい。

座長 委員の皆さんから、何か質問や意見はないか。  
 委員 宮日という社名は残したいのか。それとも全く新しい展開をするのか。  
 事務局 全く新しい方向でも良い。そのようなことも含めて、ご意見を伺いたい。今回の様々なご意見を受けて、ワーキンググループ（WG）会議を開き、第 2 回の本会議でその内容をさらにご協議・ご確認いただく。

委員 4 ページの図にある実行委員会の下の運営委員会とは、展覧会の実働ということか。  
 事務局 県美展という運営委員会、宮日美展という企画委員会をイメージしている。いわゆる準備委員会である。

委員 同じく 4 ページに国文祭の年に第 1 回の公募展を開催するとあるが、国文祭も 3 月にあるのか。また、国文祭と何か関係をもたせるのか。  
 事務局 国文祭は 10 月 17 日から 12 月 6 日である。本展は 2020 年度の 2～3 月にかけて、県美展よりも少し早い時期の実施を目標にしている。国文祭とリンクするというイメージではない。

### 柱 1 「これからの時代に合った公募展」について

座長 それでは柱 1 について、資料にある WG 会議の話題点も参考に、意見を伺いたい。ただし、他の柱と横断的に関連する内容もあると思うので、あまり柱に縛られ過ぎずに発言願いたい。

委員 教員、出品者という両方の立場から意見を述べる。若手の育成を考えるとアンデパンダン（無審査制度）は面白いと思う。しかし、欠点は、キャパシティの問題、質の問題がある。対応策として前者は先着順、またはネットで募って審査ではなく投票として上位者としてはどうか。ただし、ネットにすると全国規模となる。後者は企画書をつくる、テーマを設けるなどしてはどうか。

委員 アンデパンダンには反対である。審査のある県美展、宮日美展と審査のない市美展等もあり、現在すみ分けがうまくできている。地域の小さな公募展から自信をつけながら、県美術展、宮日美展、全国規模の美術展という流れ、レベル枠があるような立ち位置も必要なのではないか。

委員 写真塾を開いているが、参加者は高齢者の方も多し。歳をとっても順位がつくことは気持ちが燃えるようである。小さな切磋琢磨が必要で、それが向上につながる。審査制度は残して欲しい。

委員 書に関してだが、県内にひとつは刺激のあるものを残して欲しい。活性化につながる。別の角度から、県美展は近年、県民の出しやすい公募展という色合いが濃くなったと思う。宮日美展は難しく、県美展は初心者でも出しやすい雰囲気がある。書は両展の性格の違いがはっきりしてきたので、統合するのであれば、この点をどう折衷していくかが課題である。

委員 審査はあった方がよい。モチベーションにも関わる。コンクールで賞を狙うことはフェスティバルとは異なり目標になる。いかに若い人を取り込むかが肝要である。今年度、宮日美展絵画部門に高校生が多数出品したが、1 点しか通らなかった。昔はもっと通っていたようである。一つには、サイズの問題があるように思う。高文祭の絵画サイズは最大 50 号であり、宮日美展の最大 100 号には及ばない。若い人の出しやすいサイズは 50 号である。カテゴリー A（宮日美展のように難易度が高い、100 号クラス部門）、カテゴリー B（出品しやすい、初チャレンジ、50 号クラス部門）を設ける等してはどうか。

委員 入選・落選はあった方がよい。両展、似かよっているイメージだが、県民の方々にとっては大きな変化だと思うので、2 つのいいところを合わせるとするのがスムーズである。裾野を広げるのであれば竹細工、ちぎり絵を制作している方々の出品もいただきたい。また若者にではなく若者“にも”ということを考えるべきである。高文連や宮日

- ジュニア展と組み合わせるなど、全世代的な美術展にしてはどうか。
- 委員 県と宮日が組むことはメリットがある。ビエンナーレ形式の2年に1回ではモチベーションが下がるので、1年に1回が良い。企業名を冠した賞の設立は大賞の下にあって良いと思う。現部門では出したくても出せない方、取りこぼしがどれぐらいいるのか調査が必要である。工芸と彫刻を一緒にする単純な部門統合はやめて欲しい。高校生部門をつくってはどうか。
- 委員 対象は、若者から高齢者までが大前提である。宮崎市美展では92歳の方が、かなで大賞を受賞した。80代90代の顕彰、高齢者の方々の視点も落とさずに、生涯学習という立場で考えて欲しい。
- 委員 ネットに早目に規格を出して欲しい。また、どんな作品を出したらよいか分かりやすくなるので、過去の表彰作品をアーカイブ化してネット上で見られるとよい。

## 柱2 「若者に一層魅力のある公募展」について

- 座長 柱2に入るのので、柱1同様、続けて意見やアイデアを伺いたい。
- 委員 個人で絵を描いたり立体を作ったりする学生は少なくなっている。中高生がグループで制作することがあるので、出品規定にグループ可を入れてはどうか。
- 委員 グループはインスタレーション（空間芸術）絵画をイメージしているのか。現代の作家はチームとして発表することもあり、インスタレーションのことだと思うが、何人かが組み合わせさせて出す体制作りも必要かもしれない。
- 委員 特に、どのジャンルとは意識していない。
- 委員 今、宮崎で行われている芸術活動はおおよそ現在の公募展の枠に収まると考えられる。インスタレーションは現代美術として出てくるが、たくさんの作品が集まる公募展には馴染まない。チャレンジギャラリー、ワンダーアートといったある程度のスペースを与えて任せることで、若手で伸びていく方を支援する体制をつくるのが現実的である。
- 委員 県立美術館外の近くには、芸術劇場や県立図書館、屋外広場などのスペースがあるので、エリア的に現代アートの展示も可能ではないか。
- 委員 写真について、今の若い方々はプリントすらしない。最終的にはプリントするとしても、スマホ部門を作ってはどうか。写真を美術館で見てもらえることが重要である。また、先の委員の意見にもあったが、ネット配信も新しい公募展の形ではないか。
- 委員 美術を学ぶ高校生の芸術系大学への進学は経費がかかり経済的な問題によって、あきらめる事例がある。賞の中に県の方で奨学金制度を作って、学生を後押しする、支援する長期的視点を持つてはどうか。公募展と大学が連携して、将来性のある学生を大学へ送り込む等、タイアップは必要である。
- 委員 若手作家にリサーチをしたところ、副賞での県民ギャラリー無料貸出し等の意見もあったが、広いスペースを作品で埋められる作家はいないと考える。画材の提供をしてはどうか。例としてホルバインスカラシッパ（20名に1年間にわたり総額50万円の画材を提供）のような支援策がある。その他、レポート提出を条件にした国内公募展視察。美術手帖等での紹介、著名な広報誌（専門誌）での広報。東京での公募展出品に関わる出品料、運送費等の負担等々。
- 委員 写真はデータからプリント、額装まですると1点2〜3万かかる。高額で高校生にとっては難しい。作品を入れ替えられるフレームをレンタル制にして、高校生の負担を軽減してはどうか。
- 座長 高文祭では、会場借用に200万円ほどかかり苦労している。
- 委員 高校生に関しては高文連との連携を密にしなければならない。
- 委員 書は両展ともに高校生出品者が多い。しかし、大学生、20代となると極端に少なくなる。これは、高校までは部費で紙も墨も自由に使えるのに対し、大学生からは全て自費になることが要因と考えられるので、経済的なフォローも必要である。
- 委員 若手の人材育成については、本展の運営委員に、民間で若手を育成している方や障がいのある表現者の方がおられる事業所の方を入れてはどうか。広い視点で運営委員会、実行員会を組織して欲しい。

### 柱3 「宮崎ならではの公募展」について

事務局 (※柱3)について資料に沿って説明)

- WG会議で瑛九賞の設定等も話題になったが、宮崎らしさに関わる公募展の在り方についてご意見を伺いたい。
- 委員 宮日美展には、規定上、本県出身の現役の東京芸大生は出品できない。留学賞にもチャレンジできない。全国にいる人をどう取り込むのか。また、瑛九は県外の方が評価・認知度が高い。瑛九賞を設定した場合、県外の出品も可とすることになる。
- 委員 都城市美展は部門を今のままで良いかという意見もあり、60回展で平面・立体としたが、観る方にとっては好意的に受け止められている。昔は出品者の半数が高校生で、大学へのアピールにつながっていたが、高文祭ができて高校生の出品は少なくなった。今は、様々な場所・方法で自分たちによって発表できる時代となっている。全国公募にしているが、出品はほぼ来ない。郵送受付もしていない。新公募展の在り方については長期的な視点も必要である。
- 委員 都城市美展の審査に関わっている。平面・立体の中にもいろいろなジャンルがあることで、ジャンルや審査の在り方等、審査員相互の本質的な議論や話し合いができた。現代美術を対象とした瑛九（記念）賞を創設した場合、県内からは受賞者は出ないだろうが、県外出品者については、瑛九トリエンナーレのようなものを開いて、第一線で活躍している方の作品を観てみたい。普通の公募展に瑛九賞を入れるのは反対である。チャレンジ的な公募展であるならば可。賞を創設していることの価値が全国的に同意を得られるまで持ちこたえられるかどうか、よく考えなければならない。
- 委員 冠がつくことは良いことであるが、本公募展は総合的な美術展である。パリ賞等、どうして絵画だけが優遇されるのか疑問もある。また、ジャンルをまとめて審査することが良いことなのか疑問が残る。
- 委員 趣味で制作されている方は新しい部門には出品しなくなると思う。ベーシックでいいのか、ものすごい展覧会にするのか、どちらか決めておくべきである。
- 事務局 インスタレーションは審査・展示ともに作品移動を伴う公募展では困難である。5ページの「8部門」の種類や数、審査の方法についてご意見を伺いたい。
- 委員 「宮崎ならではの」にも関するが、椎葉・高千穂といった各地域でその土地の文化をテーマにした制作をし、廃校を利用して展示スペースを確保してはどうか。
- 委員 デジタルアートやメディアアートは宮崎ではまだ少ないので、現状の部門数で良い。各部門専門の審査員に見てもらうことが基本である。
- 委員 彫刻を立体でくくられると戸惑う。彫刻をお茶碗等と一緒に審査される公募展を選ぶ人もいると思うし、新しい試みとして取り組むのであれば良いとは思っている。ただし、規定が絶対とならないようにある程度幅をもたせた柔軟な対応を展覧会担当者が判断できるシステムが望ましい。
- 委員 委員の考え方が理想である。遊べるということが必要だが、県民はベーシックの方が良いのかもしれない。
- 委員 6部門残していただきたい。平面・立体にしたことにより出品者が増えたのかどうかリサーチも必要である。本県には〇〇工芸展、〇〇彫刻展のような補完する展覧会がないため、生涯学習として学んだ方がチャレンジできるように裾野を広げる公募展であるならば工芸部門を残して欲しい。
- 委員 部門統合には、審査員招聘の経費削減の意味合いがあるのだろうが、やはり専門の審査員は必要である。
- 委員 都城市美展は、しがらみがないように審査員は作家ではなく、評論家である。
- 委員 評論家も様々であり専門もある。審査にはその分野の専門家を入れるべきである。好き嫌いが審査の基準になって欲しくない。
- 委員 大きな括りとして、平面・立体の分け方は展示を工夫することは難しいが、新しいこともできる。合議が保障されれば新しい視点が見えることもある。
- 委員 絵画も制作しているが凹凸のある画面の作品をそのジャンルに出品していいのか迷

- うことはある。
- 委員 奈良美智や村上隆といった著名な作家による審査があれば、出品してみたいという若手作家がいるのではと思っていたが、実際に聞いてみるとそうではなく、見る目のある評論家や研究者に見て欲しいという方が多かった。
- 事務局 また、宮日美展に無鑑査制度がある。見る角度で様々な意見があると思うが、全国的には半数以上が無鑑査的な制度を何らかの形で実施している。新公募展で取り扱いをどうしていくかご意見を伺いたい。
- 委員 無鑑査を目標にしている出品者もいる。今年なった人もいる。経過中の方もいるので、新公募展で本制度を無くすのは反対である。これまでの無鑑査制度が、何らかの形で必要である。
- 座長 それに代わるものがあつた方がよいということ。
- 委員 今年、書部門で74歳の方が無鑑査となった。特選2回目から3回目まで毎年出品されていたが23年かかった。大変喜んでおられた。励みになっているのがわかる。
- 委員 両公募展を合体させることはすばらしいと思う。無鑑査制については難しさもある。2回目を取っている人たちは苦しいだろう。大前提として、統合には全員一致が必要であり、そして必ず実現することが大切である。出品要項等、様々な準備を行うためには数回、本会議が必要ではないか。
- 座長 委員からの意見もあつたように、本会議は今後も両公募展が発展的統合をめざして協議を進めていく。
- 全委員 (了解)
- 座長 事務局から今後の流れについて説明願います。
- 事務局 (今後の流れに説明)
- 座長 オブザーバーの宮崎日日新聞社から最後に一言願います。
- オブザーバー 2020年に統合できるのであれば、来年4月過ぎに出す平成31年度要項に、最後の宮日美展になることを謳いたい。
- 座長 以上で協議終了とする。協力に感謝する。

## 6 主催者お礼

(教育次長)

今後とも、委員の皆様からの意見やアイデア等をいただきながら、両公募展の発展的統合が実現する方向で検討を進めていきたい。

## 7 諸連絡

(事務局)

第2回は平成31年2月1日(金)の午前中で調整させていただく。

## 8 閉会 (事務局)